

むかしむかし、大むかし

あるところに、母親とまだ小さな娘が仲良く暮らしていました。父親は、とつくになくなつていて、家はたいそう貧乏でした。母親は、毎日、精を出して働いていました。ところがあるとき、母親は、病気になつて寝こんでしまいました。そこで、娘は、お金持ちの屋敷に働きに行くことになりました。

母親は、娘に鬼の面とお福の面をやつていいました。

「ええか。旦那さまや奥さまのことをよく聞いて、一生懸命働くんだよ。おまえが働きもせずになめそめそ泣いていたら、お母さんは、この鬼の面のように怖い顔になる。けれども、よく働いてみんなにほめられたら、お母さんは、このお福の面のようにうれしい顔になる。さあ、これを持って行つてこい」

娘は、村を三つも四つも越えた、峠のむこうのお金持ちの屋敷に、連れられて行きました。ふりかえり、ふりかえり、行きました。

娘は、朝早くから夜遅くまで、よく働きました。それで、旦那さまも奥さまも、娘がかわいがつてくれました。

娘は、持つて来た面を、お福の面は上に、鬼の面は下に重ねて、行李こぶりの中に入れておきました。そして、夜、みんなが寝てしまつてから、こっそりお福の面に向かつて、

「お母さん、お母さん。病気はよくなりましたか。わたしは元気で、旦那さまや奥さまにほめられています」といいました。

あるとき、仲間の女衆おなごしが、娘に、

「あんた、晩にみんなが寝てしまつてから、なにかもぞおいしい物を食べているだろ。あれを見せなさいよ」といいました。娘は、

「いいえ。おいしい物なんてありません。見せる物ありません」といいました。

女衆は、ないといわれればよけいに見たくなくて、ある晩、娘が寝ているあいだに、こっそり娘の行李を開けて中をのぞきました。中には、ぼろぼろの着物と、お福の面上に、鬼の面を下に重ねて置いてあるだけでした。女衆は腹を立てて、

「ほんとうに、何もない。あの子には、お福より鬼の面が似合つてるよ」といって、鬼の面を上にして、行李に入れておきました。

何も知らない娘は、つぎの晩、みんなが寝てから行李を開けて、びっくりしました。

母親の顔が鬼になっています。

「きょうもあんなに一生けんめい働いたのに、鬼の面になっている。もしかしたら、お母さんに何かあったに違いない」

娘はそう思うと、いてもたってもいられなくなって、家に帰ろうと、面を持って、こっそり屋敷を出て行きました。

娘は、真つ暗な夜道を歩いて行きました。母親のことが心配で、夜道が恐いとも思いませんでした。峠をどんどんどんどん登って行きました。すると、峠のてっぺんに明かりが見えました。行ってみると、山賊たちが三、四人で、酒盛りをしていました。

山賊たちは、娘をつかまえて、

「おまえ、ちようどよいところに来た。たき火が燃えないでこまっていたんだ。おまえ、燃やしてくれ」といいました。娘は、

「お母さんが病気で、早く帰らないといけません。どうぞここを通してください」とたのみました。

「火がよく燃えたら、通してやろう」

娘は、しかたがないので、薪たきぎのそばにしゃがんで、竹づつをぶうぶう吹きましたが、火はいっこうに起りません。煙ばかり出て、煙いばかりで、涙がぼろぼろ出ました。娘は、あまりに煙いので、持っていた鬼の面をつけて吹きました。

山賊たちは、酒を飲みながら、盗んできたお金を数えていましたが、ふと娘の方を見ると、煙の中に鬼がいました。

「ひゃあ、鬼が出た」「鬼だあ」

山賊たちは、お金も何も放り出して逃げてしまいました。

娘は、そこらに散らばっているお金を拾い集めて、家に帰って行きました。

「お母さん、お母さん」といって、どんどん戸をたたくと、母親が出て来ました。

「おお、おまえか。いま時分、どうしたんだ」

娘は、ほっとして、泣きながら、

「行李の面が鬼の面になっていたの、お母さんに何かあったに違いないと思って帰って来たんです」といいました。そして、山賊が置いて行ったお金を見せました。

夜が明けると、母親と娘は、お金をお殿さまのところに持って行きました。お殿さま

は、娘に、

「それは、神さまがおまえにくださったのだ」といって、お金をぜんぶ娘にくれました。それから、母親の病気もよくなって、ふたりは幸せに暮らしたということです。

原話：『伊予の昔話』和田良誉編／日本放送出版協会

再話：村上郁